



切絵「火祭り」 比企 善彦 作

# うぶすな

茨木神社社報

発行所

茨木神社社務所  
茨木市元町4-3  
072 (622) 2346

<http://www.ibarakijinja.or.jp/>

## 茨木神社と花

日本には四季があり、その季節毎に色々な花が咲きます。茨木神社でも四季を彩る様々な花を見ることが出来ます。

一月末頃から、天石門別神社裏の梅園では梅のつぼみがふくらみ始め、二月に入ると先ず黄梅が咲き、そして紅梅・白梅が芳しい香りとともに咲き始めます。

東風吹かばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春な忘れそ

撰社天満宮の御祭神の菅原道真公の御歌です。

三月の末から四月にかけては、桜の花が咲きます。当社にも以前は数本ありましたが、今は皇大神宮の横の一本だけになりました。

敷島の大和心を人とはば 朝日ににほふ山桜花 本居宣長

日本人の心とは何でしょうかと人が問うならば朝日に照り映える山桜の花（の美しさその麗しさに感動する、そのような心ですと答えよう）

久方のひかりのどけき春の日に しづ心なく花のちるらむ

紀友則

日の光がやわらかにふりそそぐ穏やかなこの春の日にあって、落ち着いた心なほに、どうして桜の花が散ってゆくのだらう。

古来から、「花」といえば「桜」で、日本人にとって特別なもの、ご承知の通り菊とともに国花になっています。

四月の半ば頃からは、正面大鳥居左右にある花水木と大鳥居を入った西側の藤が咲き誇ります。本殿に向かって左側の花水木は、白い花を右側の花水木は、赤い花を咲かせます。ちょうど花水木と藤が咲いている頃のは、季候も良

く多くの参拝者で賑わいます。これからは、椿、さつき、水仙、曼珠沙華等々が花を咲かせていき、参拝の方々の目を楽しませてくれることでしょう。



# 平城遷都千三百年に想ふ

和銅三年(七一〇年)それまでの藤原京から平城京に都が遷されて今年で千三百年になります。

そして、四月から奈良市では平城遷都千三百年祭が華やかに開催されています。この為に当時の遺構を基に天皇の即位式や外国使節との面会など、国の最も重要な儀式の為の建物である大極殿が再建され、また当時の中国への使節を乗せた遣唐使船が原寸大で復元され展示される



等、当時の都やそこに住む人々の様子が体験できるように様々な展示がされています。

平城京の時代、朝廷は中国の唐に倣って律令制の推進、貨幣の铸造、条里制や租税等、様々な国家体制整備を行いました。

その一方で和銅五年(七二二年)に「古事記」が、養老四年(七二〇年)に「日本書紀」が、和銅六年(七二三年)には「風土記」が編纂されました。また、この時代、天皇をはじめ兵士や地方の農民にいたる約四千五百首の歌が収められた「万葉集」も編纂されました。

平城京遷都(七一〇年)後、間もない時期にこれらの「書」が相次いで編纂・献上されたのでした。

「古事記」には撰進者太安万呂(おのおのやすまろ)公が「古事記」撰録の起りについて序文を記しています。そこには、天地のはじまりから、歴代の天皇の代表的事績を述べ、続いて天武天皇のご意志・お考え、つまり①諸家のもつ帝紀と旧辞とは既に真実と違い、偽りが多く



加えられていること。②漢字の伝来以後、漢字・漢文で書き慣れてきた為、古語(やまとことば)を書き表すことは難しく、書かれることに古語と違っていたこと。③しかし、まだ古語は失われていない為、古語に添った表記が重要であること。④そこで天武天皇は、まず稗田阿礼(ひえだあれい)に命じて、よく読み習わせ、そしてその言葉のままに書き記させようとしたことが述べられています。

まさに「古事記」の成り立ち、天武天皇のご意思に負うことにつぎることがこの序文からわかります。

続く我が国最初の官撰の国史である「日本書紀」においても、撰者の一人が太安万侶公であり、官撰にもかかわらず異説も悉く掲載し読者の参考に資していること、また「万葉集」も漢字の

音訓を巧みに組み合わせさせて古語(やまとことば)を表現した歌集であること等から天武天皇のご意志を窺い知ることができま

す。天武天皇は、この他に恒久的な都の造営や伊勢神宮の二十年に一度の御造替、神宮式年遷宮の制をお定めになる等、「日本の精神文化・伝統」の集大成と「日本のこころ」の継承に努められたのでした。神宮式年遷宮は持統四年に第一回遷宮が行われ、来る平成二十五年には第六十二回遷宮が行われます。まさに平城京時代(奈良時代)は、天武天皇のご意思が花開き、以後の発展の礎になった時代なのです。

## 帰幽報告

永年総代として、何かとご尽力を賜りました安達太一郎様が去る四月八日にご逝去されました。

安達様は当社社総代にご就任以来、奉賛会副会長、恵美須講元をはじめとしてひとかたならずご尽瘁くださいました。ここに永年にわたるご功績に衷心より深謝し、御霊の御平安をお祈り申し上げます。

## 神さまのおはなし ⑬

## 海幸山幸

## その一

さて、火照命は、海の幸を得る男（海幸彦）として、大きな魚・小さな魚を取り、火遠理命は、山の幸を得る男（山幸彦）として毛の粗い獣・毛の柔らかい獣を取っていました。あるとき火遠命が、兄の火照命に対して「それぞれの道具を取り替えて使ってみよう」と言って、三度乞い求められましたが、火照命は許しませんでした。しかしながら、最後に取り替えることができず、そうして火遠理命は、海の獲物を捕る道具で、魚を釣ってみたが、一匹も釣れませんでした。また、釣り針を海になくしてしまわれました。

兄の火照命はその釣り針を求めて「山の獲物も、海の獲物も、やはり自分の道具でないとうまく得られない。今はそれぞれ道具を返そうと思う」と言ったところ、弟の火遠理命は「あなたの釣り針は、魚を釣った時に、一匹も釣れずに、とうとう海中

に失ってしまいました」と言われました。しかし兄は強引に返すように迫った。それで、弟は腰につけた長剣をつぶし、償いに五百の釣り針を作りましたが、兄はそれを受け取られませんでした。また、千の釣り針を作り償おうとしましたが受け取らず「どうしても元の釣り針を得たいと思う」と言われました。

そこで、弟の火遠理命は泣き憂い海辺にいた時に、塩椎神が来て「どうしてあなた（空津高彦）は泣き悲しんでおられるのか」と問われた。火遠理命は答えて「私は、兄と釣り針を取り替えて、その釣り針を失ってしまいました。そして、その釣り針を求められたので、たくさん釣りの針を作り償いましたが、受け取られず、やはり元の釣り針が欲しいと言われました。こういう理由で泣き困っているのです」と言われました。

すると、塩椎神は、「私が、あなた様のためによいはからいをして差し上げましょう」と言って、竹で編んだ小舟を作り、その船に乗せ、教えて「私がその船を押し流したら、そのまましばらく行ってください。そのうち、よい潮路があります。そ

の潮路に乗っていけば、鱗のようにびつしりと並んでいる宮殿があります。それが綿津見神の宮です。その神の御門に着いたら、そばの井戸のほとりに神聖な桂の木があります。その木の上に登っていらつしやれば、その海の神の娘があなたを見つけて相談にのってくれるでしょう」と言われました。

そこで、教えられたままに行くと、すべてその言葉通りでした。それで、その桂の木に登っておられました。そうすると、海の神の娘豊玉毘売命の侍女が、きれいな器をもって水をくもるとした時、井戸の中に光る姿が見えました。仰ぎ見ると、立派な青年がいたので、大変不思議なことだと思いました。火遠理命はその侍女を見て「水をくれないか」と求められました。侍女はすぐに水をくんで、その器に入れて差し上げました。火遠理命は、その水をお飲みにならず、御首に掛けた玉の飾りをほどこいて口に含んでその器に吐き入れられました。すると、その玉は器にくっついて、侍女が取ろうとしても取れません。それで、玉をつけたまま豊玉毘売命に差し上げました。

豊玉毘売命は、その玉を見て、侍女に「もしかして、門の外に誰かいるのですか」と尋ねられました。侍女は「人がいて、井戸の上の桂の木の上いらつしやいます。大麥立派な青年です。われらが王にもまして、高貴な様子です。そしてその人が、水を求めたので、水を差し上げると、その水を飲まずに、この玉を吐き入れました。玉は器から取れなくなっていました。それでそのままお持ちいたしました」と言いました。

そこで、豊玉毘売命は不思議に思い、外に出て火遠理命を見て、たちまちその姿に感じ入り、目配せをして、その父に「門のところ立派な人がいらつしやいます」と知らせました。そこで海の神が外に出て自身で見つて「この人は天津日高の御子、空津高彦でいらつしやる」と言いつて、すぐに家の内につれて入り、アシカの皮の敷物を幾重にも重ねて敷き、その上を座らせて、たくさん台に載せるための物を用意し、ご馳走をして、その娘の豊玉毘売命と結婚させました。そうして、火遠理命は三年の間その国に住まれました。

# 奉賛会だより

春祭・奉賛会厄除安全祈願祭が四月十八日に斎行され、多数の奉賛会員にご参列いただきました。

祭典は午後二時より斎行され、続いて会場を参集殿に移し、総会が行われました。

総会では昨年度の事業報告・決算及び今年度の予算、安達副会長急逝による役員異動について計られ承認されました。

総会の後、宮司より「やまことば」について講話がありました。

『やまことば』とは、大陸から文字（漢字）がもたらされる以前から日本人が使い続けてきた言葉で漢字の訓読みにあたる言葉です。例えば、この日行われた春祭は本来、祈年祭きねんまつりと言いますが、「やまことば」でいうと、「としごいのまつり」古事記は「ふるこのふみ」、皇太子は「ひつぎのみこ」と読みます。やまことばは日本人の魂の源に直接根を下ろしている言葉であり、現代でも情感的、内向的な時や和歌や俳句を書く時に多く使われ、一方、音読み

である漢語は男性的・外向的であつて公文書や学術書に使われる傾向があります。

また、言葉というのは古来より言葉といひ魂が宿つていて信じられてきました。だから言葉は大事にしないとイケない。

このような日本の文化、心を伝えるものは、戦後の教育により戦前はすべて間違つたと切り捨てられてきましたが、最近では見直されてきている。等のお話をされました。参加した奉賛会の方々も「久しぶりにやまことば」と言う言葉を聞きました。うれしかったです。等の感想を述べておられました。

なお、現在の奉賛会役員は左の方々です。

(敬称略)

- ・ 会長 榎浪新三
- ・ 副会長 木内孝至
- ・ 金原藤雄
- ・ 会計 堀茂夫
- ・ 会計監査 澤田義友
- ・ 仲辻春次
- ・ 信垣茂男
- ・ 大西利昭
- ・ 今村哲夫
- ・ 鎌田健司
- ・ 理事

## 「茨木音楽祭」 in 茨木神社

去る五月五日こどもの日、爽やかな五月晴れの下、茨木音楽祭が行われました。今年で二回目となるこのお祭り、通称「茨音」。今回は開催会場を前回より三箇所多い、市内五箇所で行われ、その中の一つに当社境内が選ばれました。鎮守の森の中で行われたこのお祭、末社覆屋付近に設置された舞台では様々なジャンルの演奏家の皆さんが会場を盛り上げ、また、境内各所に設けられたエリアでは、お茶の野点や、工夫を凝らして制作されたイスの展示、樹齢約七百年にもなるうかといわれる「オリーブ」の木の観賞など、沢山のイベントが行われ、終日多くの参加者が賑わいました。

人と人との交流が益々希薄になる昨今、このように普段、それぞれに仕事をもち、音楽を愛し、地



域を愛する若者達が一つの目的に対して力を合わせ、皆で「我が町」を盛り上げようという働きかけは大変素晴らしいことです。

今回、「茨音」が盛況をおさめられました事は、出演者はもとより、その陰で働かれた地元の高校生などの数多くのボランティアの皆さんのお力があつたこととは言うまでもありません。

今後この茨木神社を地域住民の心・文化の交流の場となる「鎮守の杜」となればと願っております。

## もしもの備え

当社では本年四月より、AED（自動体外式除細動器）を設置致しました。AEDとは



心臓がけいれんし、血液を流すポンプ機能を失った状態（心室細動）になった心臓に対して電気ショックを与え、正常なリズムに戻すための医療機器です。音声ガイドしてくれるため、なたでも簡単に使用することができます。

